新潟県における江戸時代の墓

相羽　重徳（佐渡市世界遺産推進課）

発掘調査された近世墓

新潟県内で2009年段階において発掘・報告された近世墓は、40遺跡で792基ある。そのうち火葬墓は332基で、土葬墓は460基である（第1図）［相羽2009］。現況では、土葬墓は県北（阿賀野川以北）と県南（魚沼地域）及び山間部に多く分布する。一方、火葬墓は県北を除く平野部に多く分布し、特に新潟市周辺（新潟平野）が大半を占める。佐渡では調査事例が少なく、大勢はよく分からない。

本県の場合、開発に伴う緊急調査がほとんどである。つまり、開発が盛んに行われない地域においては、調査が及んでいないという分布論的課題がある。また、現代まで継続して残る墓地で、墓標があり被葬者ないしは所有者が判然としている場合、人道的観点から調査は行わず、改葬する場合がほとんどであるし、開発の対象となることは少ない。逆に言えば、発掘調査で見つかっている近世墓については、①学術調査、②墓標などが存在せず所有者が不明、③そこに埋葬地が存在することすら忘れられ、調査時に不時発見されたもの、などが多い。よって、検出された墓坑は必然的に墓地全体のほんの一部であったり、単発的な検出例が多くなる。そのため、墓域あるいは葬制の全容が詳らかとならず、畢竟、被葬者についての情報は極めて限られる。本県のこうした情報の欠落は、履歴の明らかな寺域や墓域の調査がほとんど及んでいないことにも起因している。

関連諸分野からみた近世火葬墓の分布

死者の葬法選択に当たって、火葬と浄土真宗及び地理的環境が密接な関係性を持つということは既に多くの先学により指摘されている。例えば民俗学では、井之口章次氏が火葬の普及している所を「都市とその周辺。そのほか主として真宗地帯」とし、具体的に新潟県では佐渡の対岸から西の地域と指摘している。また、「それ以外の広い地域では土葬の方があたりまえ」と言及している［井之口1977］。堀一郎氏は新潟県では「浜通り」と「平坦部」及び「信濃川流域」で火葬が多いと指摘している［堀1951］。

文献史学からは、寺島孝一氏が近世文書である『諸国風俗問状』及びその返答を紹介し、浄土真宗が盛んな新潟県において、門徒に火葬が多い点を指摘している［寺島2002］。

確かに現在（1983年調べ）、新潟県に所在する浄土真宗系寺院は、佐渡と県北（阿賀野川以北）を除く平野部に濃く分布し、山間部では希薄である。全宗派寺院に占める郡区別の浄土真宗系寺院の比率をみた場合でも「新潟」「西蒲原」「三島」「古志」「東・中・西頸城」といった平野部・沿岸部で過半数を占め、「佐渡」「岩船」「北・東蒲原」「北・中・南魚沼」「刈羽」といった山間部・県北・佐渡地域で30％を下回るなどその影響力が弱い地域であった。

つまりは、先述した発掘調査において火葬墓が優位に検出された地域に浄土真宗系寺院の分布が密であるように見える。一方で、「真宗地帯」＝「火葬」という短絡的な図式、即ち、火葬慣行が「特定宗派の規制力」に負うものであるかということについては、堀氏の指摘にあるように地下水位との関係や余剰地・材料との関連といった埋葬地の地理的要因［堀1951］は勿論のこと、埋葬者の生い立ちや死亡したときの状態など個々の埋葬事情を加味した考古学的観点から良く吟味・検証していく必要性が強く求められているといえよう。

火葬骨蔵器の選択性に関する傾向

本県では、火葬墓を検出した遺跡の発掘調査報告書において、実測図を伴い報告されている骨蔵器は100点ある［相羽2009］。

それらはすべて陶磁器(土器･瓦器含む)で､最多は肥前系陶器61点である。次いで越中瀬戸7点で、土師質土器5点、越前焼3点、信楽焼1点、高取焼1点、瓦器1点と続く。その他、産地不明陶器が4点ある。又、曲物や木箱、有機質の袋状のものも検出されている。なお、近現代の磁製骨蔵器は17点報告されている。陶磁器製容器はいずれも本県の近世遺跡で良くみられるやきもので、その選択にとりたてて特殊性は感じられない。しかしながら、それらの中には消費地遺跡ではみられないタイプのものもある。また、個々の骨蔵器が、専用容器か什器からの転用品であるかの検討は必ずしも十分とはいえず、意識及び社会情勢の変化を考える上で今後の大きな課題であるといえる。

容器容量については、過半数が3～7Lに納まり、現代東日本で通有の「七寸骨壺」に近似する。部分拾骨を慣例とし、小型の骨壺（「四寸骨壺」）を使用する西日本に対し、新潟県を含む東日本では全体拾骨を慣例とするため大型の七寸骨壺を使用するという［浅香2007］。本県出土の近世骨蔵器については､基本的に成人一体の焼骨すべてを収納するのに適したサイズを用いる傾向があると言える。出土事例からはその他、一部拾骨・分骨や子供用に使用されたと考えられる小型のタイプや、合葬・再葬に使用されたと考えられる大型のタイプも見られることから、適宜目的に応じて使い分けていたと考えられる。

副葬品の様相

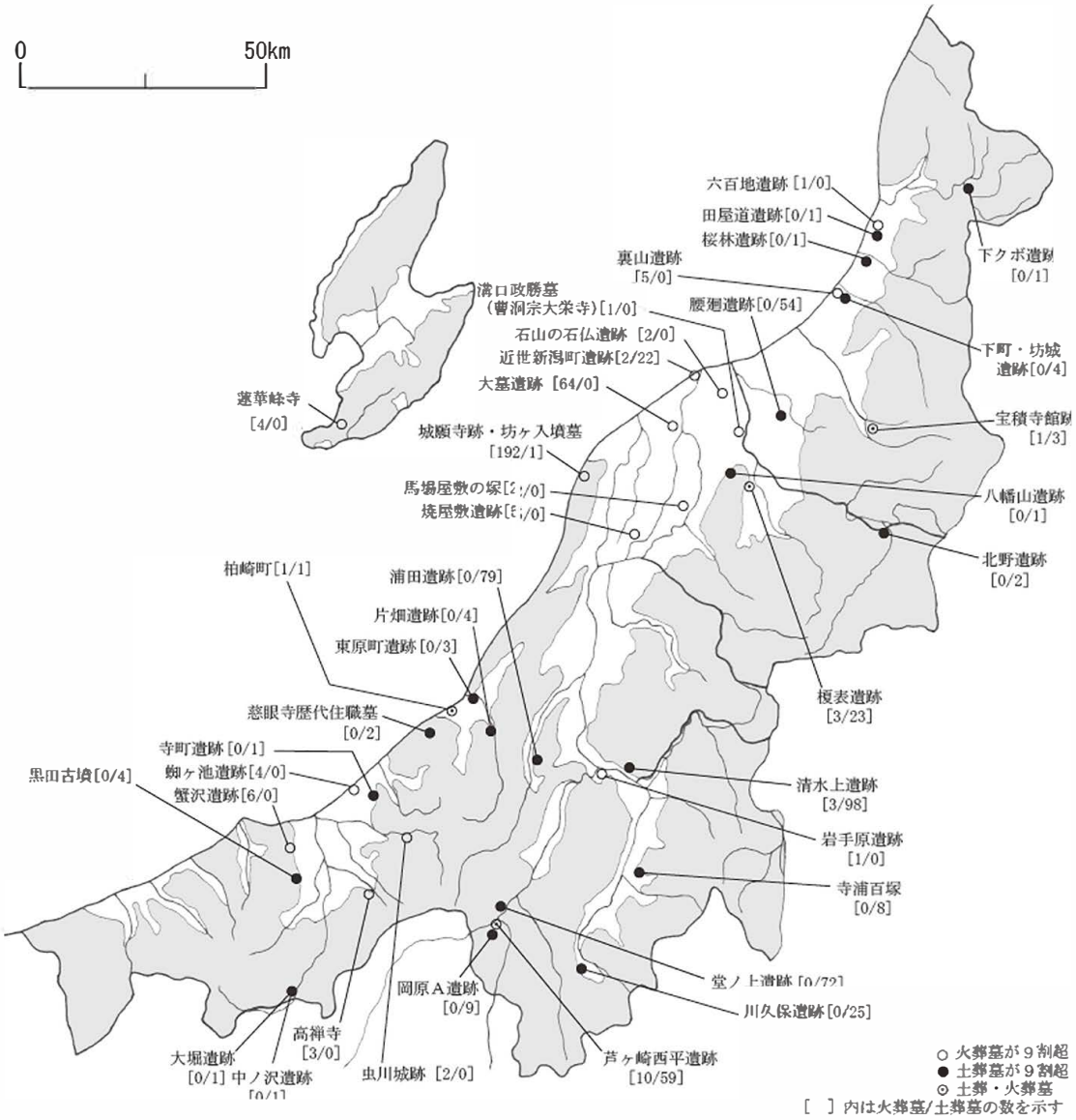
事例は少ないが、土葬墓を中心に認められる。特に寛永通宝を基本とした六道銭は多くの墓で通有にみられるものであるが、枚数は一定していない。それらには有機質編物痕が付着しているものもあることから、頭陀袋等に入れられるケースもあったと考えられる。その他、漆器椀・近世陶磁器・刀子・煙管・鏡・数珠・山笠などが少量見られる。こうした出土副葬品は民俗例との共通性が強く認められる。

埋葬容器の変遷

良好な調査事例が極めて少なく判然としないものの、これまでの事例から出現順は、火葬墓では火葬骨直葬（有機質袋状容器など含む）→陶製骨蔵器→専用骨蔵器、土葬墓では縦位桶棺→横位桶棺→縦位箱棺・横位箱棺といった出現順序が想定されている。その他、土葬墓では近世前半に横位箱棺が単独で検出される例があり、中世屋敷墓との関連が窺われる。

【引用・参考文献】

相羽重徳　2009 「新潟県における近世骨蔵器の諸相」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
浅香勝輔　2007 「糸魚川から伊良湖岬まで」『火葬後拾骨の東と西』火葬研究叢書2、日本葬送文化学会編、日本経済評論社
井之口章次　1977 「葬送の種類」『日本の葬式』筑摩書房
寺島孝一　2002 「「土葬と火葬のあいだ」補遺」『考古学ジャーナル』486、ニューサイエンス社
堀　一郎　1951 『民間信仰』岩波書店



第1図　発掘調査された近世墓［相羽2009より転載］

【参考文献】 1. 新潟県朝日村教委1991『下クボ遺跡』 2. 神林村教委2002『六百地遺跡』 3. 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「県教委・財」と略）2008『田屋道遺跡Ⅰ宮の越遺跡Ⅰ』 4. 県教委・財2008『中部北遺跡 桜林遺跡Ⅱ』 5. 中条町教委1993『築地 裏山遺跡』 6. 中条町教委1999『下町・坊城遺跡Ⅲ』 7. 新発田市教委1990『三光館跡・宝積寺館跡』 8. 笹神村教委2002『腰廻遺跡』 9. 県教委・財2005『北野遺跡Ⅱ（上層)』 10. 新潟市教委2007「近世新潟町遺跡」『平成18年度新潟市文化財調査概要』 11. 甘粕　健ほか1994「石山の石仏遺跡（遺跡番号九五)」『新潟市史資料編1』新潟市 12. 福田仁史1999「越後沢海藩主溝口政勝の墓」『新潟県の考古学』高志書院 13. 新津市教委2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』 14. 五泉市教委2005『榎表遺跡』 15. 白根市教委1984『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』 16. 新潟県教委1973『大墓遺跡・釈迦堂遺跡・半ノ木遺跡』 17.18. 巻町教委1985『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』 19. 新潟県教委1976『焼屋敷遺跡・杉之森遺跡』 20. 県教委・財1996『清水上遺跡Ⅱ』 21. 新潟県教委　1980『上の原Ⅱ・Ⅲ遺跡 木下屋敷遺跡 岩出原遺跡』 22. 中里村教委2005『堂ノ上遺跡』 23. 津南町教委2002『芦ヶ崎西平遺跡』 24. 津南町教委2005『岡原A遺跡』 25. 六日町教委1974『寺浦百塚発掘調査報告書』 26. 湯沢町教委1986『川久保遺跡』 27. 小国町教委2000『浦田遺跡発掘調査報告書』 28. 柏崎市教委2001『宮之下遺跡群』 29. 県教委・財2005『東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』 30. 柏崎市教委　2001『柏崎町』 31. 柏崎市教委2004『慈眼寺歴代住職墓』 32. 県教委・財1995『宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡』 33. 吉川町教委1995『寺町遺跡第二次発掘調査報告書』 34. 新潟県教委1981『蜘ヶ池遺跡』 35. 県教委・財2004『蟹沢遺跡』 36. 県教委・財2002『黒田古墳群』 37. 消里村教委1999『等仙寺・梶木・山崎塚遺跡』 38. 県教委・財1997『中ノ沢遺跡』 39. 県教委・財1996『大堀遺跡』 40. 小木町1984『佐渡国蓮華峰寺骨堂修理工事報告書』